

二〇一五年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから13ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答题紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしはスーパーマーケットのアルバイトで、うさぎの着ぐるみを着ることになった。ところが渡された着ぐるみの中に入って外を見してみると、見えてきたのは……。

誰もがみんな、着ぐるみを着ていた。

いえ正確には、着ているように見えるのだ。このピンクのウサギの着ぐるみをかぶり、のぞき穴から外を見ると。

これはいったいどういうことだ？

「失礼します」くりりと回れ右して、更衣室に戻ることにした。店長さんの声が追いかけてくる。

「どこ行くの？ そろそろ風船配りを始めてくれなきゃ困るよ！」

更衣室には鏡がある。わたしは鏡が見たかった。自分の姿がどんなふうに見えるのか、どうしても確かめたかった。

店員さんたちはお店に出てしまっているの、更衣室にはもう誰もいない。わたしはウサギの頭をかぶると、ゆっくりと鏡の前に立った。

そこにはウサギの着ぐるみがあった。

でも、わたしが着ているのとは色が違う。鏡のなかに見えるのは白うさぎだ。耳の形も違う。右耳が真ん中からぺりと折れている。

それにわたしは、この白ウサギに見覚えがあった。これは——これは、とても懐かしい。

そうだ、チヨ子だ。

子供のころ、大好きだったウサギのぬいぐるみだ。いつも一緒に寝ていた。公園で遊ぶときにはおぶって出かけた。家族旅行にも、だっこして連れていった。

黒くて丸い、ふたつの目。左目はもともとついていたプラスチックのものだけど、右目は父のコートのボタンだ。チヨ子を連れて友達の家に行つて、帰ってきたらとれてしまっていた。わたしが六歳ぐらいたったときだ。

「チヨ子の目がなくなっちゃったあ」

泣いて騒いで、母にうんと叱られた。そして、かわりにボタンを縫いつけてもらったのだ。だから、左右の目の大きさがちよつと違う。

鏡の中の白ウサギは、そんなところまでチヨ子そっくりだった。

わたしは自分の両腕に目を落とした。着ぐるみを通し

て見るわたしの腕は、チヨ子の腕になっていた。白い毛がすっかり擦り切れている。手首のところがほつれて、中身のパンヤがのぞいている。

これはチヨ子だ。間違いない。

チヨ子を忘れて、どのくらい経つだろう。

チヨ子と遊んだり、抱いて寝ることがなくなっても、小学校の五、六年ごろまでは、自分の部屋にいていたはずだ。でも中学になり、高校になり、成長してゆくにつれて、わたしはチヨ子を忘れてしまった。くたびれた白ウサギのぬいぐるみを、こんな子供っぽいって、部屋から追い出してしまったのだ。今ではもう、チヨ子をどこへやってしまったかさえ思い出せない。

うちの母はしまり屋だから、捨てるはずはない。きっとどこかにしまいこんでいるだろう。確かめてみなくちゃ！ 久しぶりだね。忘れていてごめんね。わたしは自分で自分を抱きしめて、子供のときのようにチヨ子をだっこした。そしてそのとき、閃いた。

他の人たちも、みんなわたしと同じじゃないのだろうか。

お店の人たちが着ている着ぐるみは、その人にとっての

チヨ子なのだ。きっとそうだ。子供のとき大好きだった玩具。夢中になって、何時間でも一緒に遊んだ相手。添い寝して、夢のなかまで付き合ってくれた、大切な大切な空想の友達。子供たちにとっては、今現在の素敵な仲間。

このピンクのウサギの着ぐるみを着ると、それが見えるのだ。

その日一日、風船配りをしているあいだ、わたしはさまざまな着ぐるみを見た。名前もわからないようなキャラクターも見た。やって来るお客さんたちは皆、何かを着ていた。それは着ぐるみみたいな形をしているとは限らない。若い女の人が、忍者の格好をしていることもある。バービー人形やリカちゃん歩いているので、びっくりしてウサギの頭を脱いでみると、おばさんだったりしてまた驚き！

小さな子供たちは、わたしが知らないキャラクターになっていることが多かった。子供番組、観ないからなあ。でもウルトラマンはやっぱり人気者だ。何かいたずらをしたらしく、お母さんに叱られてお尻をぶたれている男の子が、スパイダーマンだったのには笑ってしまった。映画を観たんだね。正義の味方は、お母さんの言うことをきか

くちやダメだよ。

着ぐるみ——ぬいぐるみでは、いちばん人気はパンダのようだった。大人のお客さんたちのぬいぐるみは、ほとんどみんなが、どこかしら傷んで汚れていた。手がとれていたり、耳が切れていたりするものも多い。

思い出だけ残して、忘れ去られた玩具たち。捨てられてしまったものもあるだろう。ちょっと見て、何だかわからなくらい汚くなっているものは、きつとそういう玩具だ。

着ぐるみを着て動き回るのはけっこう重労働なので、休憩時間はひんぱんにもらえた。わたしは事務の人に頼み、接着剤をもらった。わたしのチヨ子のほつれているところを修理したかったのだ。本当は縫い合わせてあげたかったのだけれど、着ぐるみを着たままでは、細かい針仕事はできない。

「その着ぐるみ、どこも破れてないけど？」

接着剤をくれた事務の人は、不思議そうな顔をしていた。わたしは笑ってごまかして、更衣室でチヨ子に応急処置をしてやった。

午後三時ごろになると、だいぶ疲れてきた。一方で、ぬ

いぐるみと玩具の大行進にはすっかり慣れてしまった。もうどんなものがそこらを歩いていても平気だ。コンニチハと言って風船を差し出すだけだ。

と思っていたら——

一人だけ、普通の子供を見かけた。そちらの方が自然なのに、わたしはとても驚いた。

中学一年生ぐらいだろうか。顎のちよつとしゃくれた、きかん気そのな少年だった。Tシャツにジーンズ、ブランドもののスニーカーを履いている。

日曜日なのだし、このお店では文房具なども扱っているので、中学生が一人で来てもおかしくはない。少年がお客さんたちの流れに混じって店内に消えてゆくのを、わたしは目で追って見送った。

あの子には、小さいとき大切にしていた玩具がなかったのかしら。今も、何もないのかしら。

まあ、そういうこともあるのだろう。わたしはまた風船配りに励んだ。

一時間ほどして、休憩をとろうと更衣室に戻りかけた。奥の事務室がなんとなくあわただしい。通りかかった店員さんに、着ぐるみの頭を脱いで、どうしたんですかと

尋ねた。

「万引きを捕まえたの」

店員さんは顔をしかめた。

「中学生なんだけどね。常習犯なのよ」

とつきにわたしは、さっきの、着ぐるみにも玩具にも見えなかった少年のことを思った。

「警察に報せるんですか」

「どうか。まず親を呼ぶのが先ね」

しばらく後、冷たい物を飲み、汗をぬぐって着ぐるみを着なおし、わたしが店の前に出て行くと、タクシーが一路肩に寄って、女の人を一人おろした。この人も、着ぐるみにも玩具にも見えなかった。タクシーの運転手さんはマグマ大使に見えるのに、女の人はどこまでも普通の人間にしか見えなかった。

顎の形が、あの少年に似ている。

きつとお母さんだ。

お店の奥へと消えてゆく。不機嫌そうな表情は、パーゲンに沸き立つ日曜日のスーパーには、ひどく不似合いなものだった。

夕暮れが近づき、ますますお客さんは多くなり、風船は

なくなっても、チラシをまいたり、子供たちと握手したりして、忙しかった。が六時であるが約束だ。そろそろだ——と思っていると、あの女の人と少年が出てきた。やっぱり母子だったんだ。並んでいると、本当によく似ているのがわかる。

二人して、何かに押しつぶされたみたい、歪んだ顔をしている。顎の噛み合わせが悪くなっちゃうよ。

二人はわたしのすぐ脇を通った。しゃにむに歩いているので、ぶつかりそうになってわたしは避けた。

そして気がついた。二人の背中に、何かくつついている。

垢のかたまりみたいなものだ。いや、煤だろうか。黒くてふわふわしていて、何か気持ちの悪いものだ。

はつとして、わたしは着ぐるみの頭を脱いだ。急ぎ足で遠ざかる二人の後を、何歩か追いかけて近づいた。

少年のTシャツの背中にも、お母さんのブラウスの背中には、何もくつついていない。

わたしはウサギの頭をかぶった。すると、また二人の背中に黒いものが見えた。今度ははっきりと、手の形に見える。*鉤爪の生えた痩せた手。その指先が、少年とお母さん

の肩を、後ろからつかんでいる。しかも、3 動いている。背中を這う蜘蛛みたいだ。

ぞっとして、わたしは震えた。

あれは何だろう？ 何かとても、とても、悪いものだと
いう気がする。

着ぐるみや玩具を着ている人たちには、あんな黒い手は
張りついていなかった。誰も、あんな気持ち悪いものに憑
かれてはいなかったのに。

更衣室で着ぐるみを脱ぐと、壁に立てかけた。ピンク色
の4 したウサギは、きょとんとした顔でわたしを
見ている。

「ねえ、あれ何？ わたしに何を見せてくれたの？」

もちろん、着ぐるみは何も答えてくれない。

わたしは考えた。あの母子の背中にくっついていて、不
気味な黒いもの。世の中に漂う、悪いもの。わたし
たちは誰だつて、それに憑かれる危険があるのだ。そし
て悪いことをしてしまう。万引きだつて、そのひとつだ。

でも、ほとんどの人がそんな羽目にならないのは、身に
まっとうしている着ぐるみや玩具たちに、守られているからじ
やないのかな。

何かを大切にしたい出。

何かを大好きになった思い出。

人は、それに守られて生きるのだ。それがなければ、悲
しいくらい簡単に、悪いものにくっつかれてしまうのだ。

このピンクのウサギの着ぐるみは、わたしにそれを見せ
て、教えてくれたのだ。

「あなた、凄いな」わたしは着ぐるみに話しかけた。

五年間、倉庫に置きっぱなしにされているあいだに、中
身が空っぽのウサギさんのなかに、何かが宿ったのだ。悪
いものではなくて、そう、清らかなものだ。それはずっと
息づいていて、この着ぐるみに不思議な力を与えた。

F これ、欲しいな……と思った。

そのとき、壁にもたれていた着ぐるみの頭が、ゆらりと
傾いた。触ったわけではない。動かしただけではない。

—— やめておきなよ。

わたしに向かって、着ぐるみがかぶりを振ったのだ。

急に怖くなって、わたしは着ぐるみから一歩離れた。着
ぐるみのウサギは、今度は反対側にふらりと首を振って、
元の位置に戻った。

今度も、触ったわけじゃないのに。

「^Gそうだね。やめとくよ」

声に出して、わたしは言った。

「わたしにはチヨ子がいるもんね」

ピンク色のウサギの顔が、かすかに笑ったように見えた。

その晩、母に電話をかけた。チヨ子、チヨ子と騒ぐわたしに、母は面食らったみたいだ。

「チヨ子なら物置に入れてあるよ」

「持ってきてー！」

ああ、よかった。お母さんはチヨ子をとっておいてくれたんだ。よかった。ごめんねチヨ子、物置なんかに入れてばなしにして。

ごめんね、すっかり忘れていて。

「もしもし？ 持ってきたよ。どうしようっていうの、これを」

「チヨ子、無事？」

「無事も何も……汚れてるけどね」

「手のところがほつれてない？」

母はちよつと黙^{だま}ってから、答えた。「ほつれたところを、接着剤でくつつつけてあるよ。これ、あんたがやったの？」

不器用だねえ。はみ出してるよ。だけど、いつこんなことしたの？ 接着剤、まだ新しいみたいだよ」

わたしは嬉^{うれ}しくなって、狭^{せま}いアパートの壁に向かって笑った。

「お母さん、あたし今度の週末に帰るから、チヨ子、陽のあたるところに出しておいてやってね。絶対そうしてね」

「あんた、何言ってるの？ 大丈夫かい？」

大丈夫だよ。わたしは笑いながら答えた。

「^Hチヨ子のこと思い出したから、迎^{むか}えに行くんだ！」

(宮部みゆき「チヨ子」による。なお、問題文の一部を省略している。)

【注】

*パンヤ——ぬいぐるみの中につめる綿のこと。

*しまり屋——むだ使いしないよう日々心がけている人。

*しゃくれた——(あごが)長くて出っぱっている。

*きかん気そうな——気の強そうな。

*マグマ大使——ヒーローキャラクターのひとつ。

*しゃにむに——一直線に。ひたすら。

*鉤爪——内側に曲がった、するどい爪。

*かぶりを振る——かぶりは頭のこと。「かぶりを振る」

で、不同意を表すしぐさ。

問一 に入る最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しとしと イ ずんずん ウ もぞもぞ エ よれよれ オ わんわん

問二 ——部A「その人にとってのチヨ子なのだ」とあるが、「その人にとってのチヨ子」とはどういうことか、わかりやすく説明しなさい。

問三 ——部B「笑ってしまった」とあるが、どのような点がおかしくて笑ってしまったのか、わかりやすく説明しなさい。

問四 ——部C「ぬいぐるみと玩具の大行進」とあるが、^ゝ「実際」^ゝと^ゝわたしの目に映っているものゝとの違いをわかりやすく説明しなさい。

問五 ——部D「普通の子供」とは、どんな子供か。二十字以内で本文中から抜き出しなさい。

問六 ——部E「背中を這う蜘蛛みたいだ」とあるが、「蜘蛛みたいだ」とわたしが感じ取ったものはいったい何か。十五字以内で本文中から抜き出しなさい。

問七 — 部Fで「これ、欲しいな……と思った」わたしが、 — 部Gでは「そうだね。やめとくよ」と考えなおしたのはなぜか。わたしの、自分自身に対する気持ちの変化を、百字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 — 部H「チヨ子のこと思い出したから、迎えに行くんだ！」とあるが、この最後の言葉から、わたしのどのような思いを読み取ることができるか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア これまで自分はチヨ子のことをすっかり忘れてしまっていたけれども、チヨ子は自分を忘れずに守り続けてくれていたんだと考え、これからはチヨ子と一緒に生きていきたいという思い。

イ これまですっかり忘れて物置に放置してしまっていたチヨ子に対して申し訳ない気持ちから、一刻も早く破れているところを直して、陽のあたる暖かな場所に置いてあげたいという思い。

ウ これから先、自分がどんな悪いものにくつつかれてしまいか不安になり、その不安を取り除き安心するためには、どうしてもチヨ子をそばに置いておかなければならないのだという思い。

エ このままチヨ子を物置に放置していると、チヨ子が自分を守るところか、逆に自分への恨みから悪いものになってしまいかもしれないという恐れから、早く大事にしなればという思い。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ヨーロッパ人は、家畜の頭・顔・胃・脳髓・心臓・肝臓・腎臓・骨髄その他、食用になるものはなんであろうと平気で口にされる。もとの形のはっきりわかるものがそのまま食卓にのぼっても、いっこうに気にならないのである。

いまなら、もとの形のはっきりわかるものを食べるといっても、パリの家庭婦人の材料入手先は肉市場である。ここでは、豚の頭や仔ウシの面皮が家庭でかんとんに調理できるように、あらかじめおぜんだてできている。

【 1 】、古い時代になればそうはいかない。とくに農業が主要な産業であった時代には、肉食とは、自分たちの飼っている牛・馬・羊・豚などを自分たちの手で殺して食べることであった。生前からよく知っている家畜の頭や胴体を、フォークでつつきながら舌つづみするのである。

ところが、彼らは、日本人にはついていけない、このような行動を平気でやっておきながら、他方で動物愛護運動にきわめて熱心である。かれらは、しばしば、日本人は動物に残酷であると非難する。

このような相違は「残酷」という言葉の意味・内容が、日本人とヨーロッパ人とはまるでちがうからである。動物愛護というと、日本人は、ともすれば、動物を人間と同じように扱い、動物を絶対に殺さないことだ、と考えやすい。なかには肉食主義を動物愛護の極致だと主張したりする人もたくさんある。

欧米諸国の動物愛護運動は、そうではない。そこでは動物を殺すこと自体はけっして残酷ではない。残酷なのは必要な苦痛をあたえることである。

事実、ヨーロッパ人なら、飼犬などの面倒をみきれなくなると、あつさりと殺してしまう。しかし、日本人はちがう。殺すのは残酷だと考え、だれかが拾ってくれるのをあてにして、生かしたまま捨てる。その結果は野犬の増加である。ヨーロッパ人はこれがわからないという。かれらにとって、飼犬を野犬にするぐらい残酷なことはないのである。ちなみに、欧米諸国の動物愛護団体は、動物を安楽死させたための獣医をかかえているのがふつうである。

動物愛護運動の対象は、もちろん、動物一般である。なかでも、実際の重点は、小鳥のような、愛玩用動物にある。

しかし、考えてみれば、食用家畜のときもこの事情は変わらない。どうせ殺して食うのだからといって、家畜を手あらに扱ったのでは、十分な成育は期待できない。たいせつに育てたうえで、食用にするのである。だから、もとの形のはっきりわかるものを食卓にだすのはなにもとやかくいうものではない。ここでは、動物愛護と動物と畜がみごとに同居しているのである。^Eこのような状態から出てくる思想こそ、実は、ヨーロッパ人の高い肉食率の産物なのではなからうか。

このようにいうと、【 2 【奇異な感じがするかもし

れない。動物に対する態度が思想の根本を規定するなどと考えるのは、あまりにも一方的な立場に見えるかもしれない。しかし、このような感じこそまさに、動物との接触のうすい、日本独特の環境のせいなのである。ヨーロッパがまるで異なった環境にあることをわれわれ日本人はすっかり忘れてしまっている。

(鮪田豊之『肉食の思想・ヨーロッパ精神の再発見』による)

【注】

*動物と畜——食肉用に動物を殺すこと。

問一 【 1 【・【 2 【に入る最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ところで イ けれども ウ あるいは エ たとえば

問二 ― 部A「おぜんだて」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 何回も繰り返し返される予行演習のこと。

イ うまく事が運べるような準備のこと。

ウ おいしく食べられるメニューのこと。

エ 誰でもできるように工夫された道具のこと。

問三 ― 部B「このような行動」とは、どのような行動のことか答えなさい。

問四 ― 部C「なかには菜食主義を動物愛護の極致だと主張したりする人もたくさんある」とあるが、なぜ菜食主義は動物愛護の極致なのか理由を答えなさい。

問五 ― 部D「欧米諸国の動物愛護団体は、動物を安楽死さすための獣医をかかえているのがふつうである」とあるが、なぜ安楽死をさせることがふつうなのか説明しなさい。

問六 — 部E「このような状態から出てくる思想」は、ヨーロッパ人の家畜に対する態度としてどのように現れてくると考えられますか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 食べるために大切に育てた動物であるから、無駄のないように食材として利用すること。
- イ 家族のように愛着を持って育ててきた動物だから、それとわからないように調理すること。
- ウ 食用に育てたものだから、もとの姿のまま調理されたものが新鮮だと思っておいしく食べること。
- エ 家畜と愛玩動物は別物なので、牛や豚は飼犬・小鳥のように愛情を注ぐ価値のないものとして接すること。

三

次の傍線部について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みがなをひらがなで入れなさい。

- ① バスのコシヨウで遅れてしまった。
- ② 合唱祭でシキをする。
- ③ ヒビヨウカたちもほめていた。
- ④ あの人は類いまれな才能の持ち主だ。
- ⑤ タントウチヨクニユウに言おう。